



交通 評論

ニア州まで「見学」に
行った。発電所には近
づけなかったが、川の
土手までは規制もな
く、のどかな田園風景
が広がっていた。

数年後に「メルトダウン
(炉心溶融)」が起こって
いたことを知りぞっとし
た。当時、「メルトダウ
ン」という言葉は「まさ
か」というニュ
アンスでひそひ
そと話されてい
た。

チェルノブイ
リ事故が起こっ
た1986年4
月には気象研究所に勤めて
いた。1954年の第五福
竜丸被ばくと50、60年代の
大気圏核実験で世界に環境
放射能観測ネットワークが
構築され、気象研究所地球
化学研究部は日本各地の降
水の放射性物質の観測を行
っていた。

事故当時、高精度の放射
能測定に対応できる少ない
核種であるSr-90は、化学
分離の技術が必要とする測
定に手間隙がかかるが、核
爆発でも原発事故でも放出
量が多く、カルシウムに似
て骨に蓄積されやすく重要
な核種である。1986年
後半には気象研究所は、廣
瀬勝己研究官のプルトニウ
ム(Pu)のデータも併せて
研究報告を行い、日本の測
定技術の確かさを証明した。
さて、今回フ
クシマの事態を
受けて、195
4年以来蓄積さ
れている高精度
のデータの上に観測データ
が公表されることを期待し
ている。しかし、新聞やテ
レビニュースにデータがあ
ふれているが、Sr-90やPu
のしつかりしたものは発表
されない。ヨード(I-131)
31)やセシウム(Cs-137)
37)が検出されていれば
必ずあるはずだと思ひ、気
象学(江戸川大学名誉教授・
元気象大学教授)

メルトダウン

土器屋 由紀子

3月11日以来、日本の風
景がどこか変わってしまった
と感じている。マグニチ
ュード9.0の地震とそれ
に続く津波の甚大な被害に
加え、福島原発事故は世界
を震撼させた。そして、恐
ろしいことに、原発事故は
被災地の雪が溶け春がめぐ
り既に夏になろうとしてい
るのに、原子炉の安全な管
理には程遠い状態である。
日々伝えられる大気線量の
データはやや減少傾向にあ
るものの、依然として高い
地点がある。土壌汚染、海
水汚染の状況は予断を許さ
ない。

1979年米国スリーマ
イルアイランド事故の折、
たまたま米国標準局に勤め
ていた筆者は、原研から派
遣されていた友人と2時間
余のドライブでペンシルベ

(江戸川大学名誉教授・
元気象大学教授)